

## 専門部会委員による事業評価報告書

報告日：令和8年2月6日

報告者：常盤 成紀

### 令和7年度「つどい、つながる文化の会議」事業評価について

---

#### 評価指標①：文化芸術を通じた交流の機会が充実している

##### ■文化の会議を通じての参加者の行動等の変化

###### ・着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）

まず全体を通してアンケート集計結果の捉え方について、毎回の出席数にばらつきがあり、割合の変化で見るか絶対数の変化で見るか難しいところだが、今回は絶対数の変化に着目し、関係する情報を確認して考察する手法を取った。したがって受託者報告書の自己評価と一部見解は異なるものの（毎回の平均ポイントだけでは評価できない）、アンケート集計結果はおおむね肯定的に捉えてよいと思われる。

「文化の会議参加前と後で、アートやアートを通じた活動について、心境や行動の変化はありましたか？」という質問では「非常に思う」「まあまあ思う」が高く、室野氏講義の影響が大きいことが見て取れた。また、「全5回の活動を通して、ご自身で「トライできた」と感じることは、いくつありましたか？」という質問では、多くの参加者が具体的な挑戦を実行している。ただし運営側としては今後、それらの挑戦の中でも特に育成趣旨に沿う「挑戦」の広がり、深化を支えるコミュニケーションが求められるだろう。次に、「今回の活動を通して、新しい出会いやつながりを感じましたか？」という質問の回答を見れば、3回目（視察回）で数値が向上するのはある意味自然であり、それ以外の回において改善を促すためには、「参加者同士のつながり」を深化させる工夫が今後必要となるかもしれない。ところで、1回目から6回目までの全体的な変化の傾向を見ると実は3回目における上昇を除き基本的に数値が下がっている。ただしそれはおそらく初回の期待値が高い反面、学びや経験を経て個々の自信が現実的なラインに収斂したのではないかと考えられ、それは自然なことでもある。その中で6回目の回答で共通質問に「非常に思う」「まあまあ思う」と回答した参加者の間では、「トライできた」回数に0～5回とかなり開きがある。これは実践に必ずしもつながらなくとも個々に満足感を得ているとみてよい。

###### ・実際にご覧になられた様子（参加いただいた回を通じて）

第5回を視察したところ、講師の話題提供後に実施されたディスカッションの中で、「アーティストだけでなく関わるみんなの思っていることをコーディネートするのが求められているのかも」「ジャンルでアートを表現するのは簡単だが、本質的なところでアートに取り組むのも大事だと思う」という発言があり、アートコーディネーターやアートに関する学びが深まっていることがうかがえた。個人の考え方の変容を周囲に伝えられるようになった様子は、広くとれば行動等の変化とあってよい。

###### ・参加者インタビューにおいて着目すべき意見（受託者意見含む）

前項同様、学びの深まりも含めて記述する。インタビューの中にはコーディネーターを市民とアー

ティストの間に立つ一者ではなく、様々な領域の中に存在し、発信やつなぐ役割を担う存在なのではないかと思うに至ったと話した。そして今後は、アートの側だけではなくそれを受け取る人々がどのように感じ、効果を得ているのかも確認できることで、より現実的なアート実践に落とし込めるのではと語り、そのようなコーディネーター像を目指すと話した。また別のインタビューは、公立施設で働く経験から施設のリソースを活かして社会課題にアプローチできないかと考えるようになったと話した。これらは近い将来の具体的な行動変化を支える重要な兆しである。

#### ■文化の会議を通じた参加者同士や事務局との交流

##### ・着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）

「文化の会議への参加がきっかけとなり、色々な活動をされている方に興味を持ち、話を聞いたり関わりをもったりする機会が増えました。」という意見がある一方、「メンバーの関心も多様で、参加目的や意識にも温度差があったように感じました。」という意見を始め、中にはコミュニケーションが成立しづらい状況に困惑する意見もあった。実際に参加者各自の経験の有無や参加動機のばらつきによって生じたものと思われる。

##### ・実際にご覧になられた様子（参加いただいた回を通じて）

グループワークを見る限りおおむね良好な関係性の中で対話が行われていたと認められる。特に運営側である市や受託者もフラットな場づくりに徹し、寄り添う姿勢を見せていた。アンケート集計結果に見られる運営への好意的評価はそれを裏付ける。また例えば第4回の視察においては、参加者が視察成果をグループ内で共有するのにゆったり時間を使っていたのがよかったように感じた。

##### ・参加者インタビューにおいて着目すべき意見（受託者意見含む）

インタビューでは、「同じ茨木に住みながら、世代や見ているもの、感じているものが違う人たちと話をすることができて刺激を受けた」という意見や、アートとは何かをめぐって表出する考え方の違いを面白く受け取ることができたという意見（例えば「本物」のアートは存在するのかという議論）等があり、アンケート集計結果だけでは見えなかった肯定的見解が確認できた。他方で、参加者相互のバックグラウンドが分からず、時にネガティブな発言になったり、発言をネガティブに受け取ってしまったりということが起こったという報告があった。この課題は受託者側も認識しており、文化の会議に求めるレベル感が参加者によって異なり、参加者自身もそれぞれ関わり方を悩んでいたことも含めて、多様な市民が集う場のマネジメント、デザインはいかにあるべきかの困難が受託者へのインタビューで語られた。

#### 【コメント】

本指標①を構成する「参加者の行動変化」及び「相互交流」は、次指標②の主要素「働きかけ」と原因結果関係にあるとあってよい。また、令和7年度は学びやアイデア形成をゴールに置く中で、学びやアイデア形成が個人の中で実現するほど「行動変化」を促し、またその学びやアイデア形成を他者と共有することで「相互交流」につながる、という関係性にある。ここにあってまず視察や講義から示唆を受けた様子は十分に確認でき、参加者によっては「トライ」に結びついていた。またそれが「相互交流」につな

がっていたかについては、運営側の努力はありながら、参加者の多様性を包摂する事業運営上の難しさ  
と、その前提となる育成方針の明確化に関する課題によって、部分的にコミュニケーション不全が起こ  
る状況であった。この課題に対しては、具体的な現場実践を本事業に実装しそこでの試行錯誤を通して、  
運営者や参加者自身が解を見出していくしかない部分があるだろう。

---

## 評価指標②：だれもが文化芸術とつながる環境がつくられている

### ■参加者に市民 AC として活動してもらうためのはたらきかけ

#### ・着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）

「全 6 回の活動を通して、コーディネーターとしての役割等について、理解が深まりましたか？」と  
いう質問では、数値的にも高く、理念や求められる態度については理解が深まっていたとみてよい（イン  
タビュー結果からもその結論が支持される）。他方記述では、具体的な実践イメージを持つに至らない声  
もあり、今後は理念と実践を架橋するデザインが求められる。その傍証として、例えば全体的に室野氏の  
講義は多くの参加者に影響を与えていることが各記述から確認できる反面、同回の数値は他回と比べて  
必ずしも高くない。理念に感銘を受ける一方、自分事として具体的に考えるにはまだ時間がかかること  
の表れといえる。また、「市民アートコーディネーターとして今後取り組んでみたいことがあれば、ご記  
入ください。」という質問では様々な回答が得られたこと自体素朴に良いことであり、今後はさらに、ど  
んなイベントをしたいかだけでなく、そのイベントでどういう役割をしたいかまで意見が出るような  
働きかけが求められる。なお「地域社会に貢献したいという気持ちは高まりましたか？」という質問への  
回答については、全体的に数値が下がっているとはいえ「まあまあ思う」に収斂している傾向があり悪く  
ない結果だといえる。

#### ・実際にご覧になられた様子（参加いただいた回を通じて）

すでに言及した通り、運営側である市や受託者がフラットな場づくりに徹し、参加者に寄り添う姿勢  
を見せていたのが印象的だった。他方で、そこまで気を遣わなくとも、市も受託者も時には踏み込んで自  
身の価値観を伝えてもよいのではと思うところもあった。もちろん、忌憚のないコミュニケーションを  
取れるようになるまでには時間がかかるだろうし、個々のパーソナリティにもよるだろう。安心安全の  
場づくりは十分実現できているので、次はよりインタラクティブな場になるとよいと思う。

### 【コメント】

グループワークの進行、視察や講義の設定を通して、学びや学びの言語化、共有に関する働きかけは積  
極的に行われていたことが評価できる。実際に現場を見たり、アーティスト等の当事者と話したりする  
ことでようやく理解できることは多い。その意味で参加者の多くが現状、まだ学びを必要とする段階に  
あるともいえる。他方で、同時並行して参加者が自らコーディネーターとしてのイメージを膨らませて  
いくにあたっては、前指標①コメントにも記したように、コーディネーターとしての具体的な現場実践  
の体験が今後は必要となるだろう。講義で理念への理解を深めるだけではむしろ抽象度の方があがりす  
ぎてしまう。具体的な実践が伴うことで、参加者各自が関われるレベル感や内容を改めて自ら問うこと

ができるようになるだろう。

---

評価指標③：気軽に文化芸術活動に参加できる機会、きっかけが充実している

■文化芸術にふれる機会としての文化の会議の役割

・着目すべきデータ（アンケート結果等資料参照）

「文化芸術活動に対して、以前より「関わりたい」と思う気持ちが高まりましたか？」という質問への回答では、「まあまあ思う」が常に同水準を維持している部分が評価される。また、「新しいことへの好奇心や、アイデアを得ることができましたか？」という質問について、大変興味深いことに、全共通質問のうちこの質問への回答だけは3回目がピークではなく、むしろ最終回で数値が持ち直している。6回かけてようやく好奇心やアイデアが形になったという参加者がいたのかもしれない。

・参加者インタビューにおいて着目すべき意見（受託者意見含む）

たびたび言及される参加者の多様性を本事業がどのように包摂できるかという課題について、インタビューの中で受託者からも、気軽な参加者と熱量の高い参加者がいたり、知識や経験に参加者同士で差があったりする中で、「どのように均していくのが正解かもわからない」という正直な気持ちが聞かれた。ただその中にもあっても受託者が、例えば気軽な参加者が「自分は場違いかもしれない」と思わないように、どんな動機の参加者もその場において取り組みに関わることが可能な（実際には「許される」と表現されていたが含意を踏まえて言い換えた）場なのだということをどう「設計」できるかが大事だと気付いたと語り、次年度以降の重要な示唆であると感じた。

【コメント】

実は参加者の中にはアンケートで「もっと主体的にならねばと反省した」という趣旨の意見もあり、何も参加者は「運営側がもっと考えてくれなければ困る」というだけの態度を決め込んでいるわけではない。その意味では、コーディネーター育成方針はどうあるべきか、多様な背景の参加者が包摂される場がどう作られるべきかは、参加者と対話的に見出していくという方向性もありうるのかもしれない。もちろん運営側には一定の仮説が必要であるが、その検証は参加者に開かれていてもよいと思われる。

---

《総括コメント》

「市民アートコーディネーター」の育成というとき、実は「市民」も「アート」も「コーディネーター」も定義が極めて難しい概念である。その中でも本事業は果敢にこれらにまつわる理念を追究し、「市民アートコーディネーター」を社会実装しようとしている。その手探りの事業推進の在り方それ自体が、実はワークショップ的だといえる。私たち専門委員もまた、そのワークショップのメンバーに加わっているつもりだ。

今回の成果検証を行う過程で、経験や知識の量、あるいは熱量の異なる多様な背景の参加者同士がす

れ違う様子や、それに対するマネジメントの課題が確認された。言ってみればこういう困難が起こるにもかかわらず、それでもわざわざ「市民アートコーディネーター」を育成し、協働してこうとすることがなぜ大切なのか、私たちは今一度考えなくてはならない。それは端的に職業者だけではアプローチできない水準や領域があるからに他ならないのであるが、そうであるのに私たちは、ともすれば参加者である市民を職業者予備役のように対象化していないだろうか。あるいはそういう育成の場だと、参加者自身も認識してしまっていないだろうか。

当然ある専門性を軸に取れば、それに詳しい、詳しくないという序列が出来上がる。ひいては、職業者アートコーディネーターの職域の一部を市民に切り出す（この部分ならできるといえるでしょう、という具合に）、というような発想になる。しかしそもそも、「市民」とひとくくりにされている彼ら一人ひとりを見れば、皆それぞれに関心事があり、熟知していることがあり、思い入れがある個別多様な人々である。人はそれぞれに一日の時間の使い方があって、その中で一日中コーディネーターをしているのが職業者コーディネーターであるというに過ぎない。そんな生活を送る職業者が知らないたくさんの方のことを、「市民」とくくられる人たちはそれぞれによく知っている。私たちは「市民を育成する」というけれども、まず私たちがその彼ら市民のことを十分に知っているだろうか。経験や知識の差で気後れする参加者が現れてしまっているのは、その人の良さ、つまり「市民」の良さが活かされていないのではないかと常々思う。今一度、これまで抽象化されてきた「市民」の個別具体性を取り戻すのが大切であると感じる。その先に、市民の持ち寄るべき得意技や専門性が改めて浮かび上がるだろう。

その可能性が実はインタビューに現れていた。インタビューで参加者からは、コーディネーターとは誰かと誰かの真ん中に立つ抽象的な存在ではなく、いろんな領域にコーディネーターがいて、それぞれが発信したりつながろうとしたりするものだと思えるようになったと話していた。またそうであるから、自分はよりアートを享受する側の目線に立って声を拾っていきたくてと抱負を述べていた。さらに別の参加者は、公立施設での勤務経験から、施設の使われ方が勿体ないと日々思っており、越境できる存在としてのコーディネーターがこうしたリソースを活用できる存在になるとよいと思ったと語った。そして他者の関心や困りごとを「聴く姿勢」と相手に応じて物事を提案できる力が大切だと述べていた。誰しも生きていけば気になることが生まれてくる。インタビューそれぞれ、そうした自分の生活から出発して活動につなげようとしており、その多様性と固有性こそが「市民アートコーディネーター」の可能性である。2年間の文化の会議は、ここに小さく確実に成果が実りつつある。

それではどうすればそうした「市民性」が活かされるかといえば、具体的な現場実践の中で自分自身の固有性が取組とつながる部分を探そうとする（あるいは見つける）経験を繰り返していくことにあるだろう。実際、どういう取り組みが自分にぴったりはまるかは、やはりやってみないと分からない。他方で、あまり実践経験のないまま（頭の中だけで）頑張っただけで探そうとしても、なかなか見つからない。むしろこういうものは、いろいろやるうちに出会うものであり、あるいはふと腑に落ちる瞬間が来るというものでもある。だから本事業では次年度以降、そのきっかけとして具体的な実践が設定されるのがよいだろう。

5つの「つ」はコーディネーターのスキル一覧であると同時に、自分たちが自分の得意なことを見つける指標にしたり、協働する仲間の強みを探す指標にしたりするのがよい。全部を網羅する必要はない。すごいコーディネーターにならなくてもよいし、すごい事業をやるだけが成功ではない。自分の望む規模感、レベル感を共有できる仲間が見つかることが大切だ。次年度以降は、そういう現実的な感覚を身に着け、小さな成功体験を無理のない範囲で獲得できるような経験の場が設定できるとよいと思う。